

ひんぱんに利用するわけではないが、タクシーに乗るとなるべく運転手と話すようにしている。無言では、相手も不気味だろう。どんな人間が乗ってくるかがわからないタクシー運転手というしごとの大変さを思う。話すときにいちばん無難なのが天気の話題だろう。下手にプロ野球に触れたとたんに発話が止まらなくなる阪神タイガースファンのドライバーもいる。

近ごろ、天気に関してドライバーからよく聞くのが、「最近の天気予報はよくあたるからね」である。「予報では午後から雪のようですが、どうなんでしょう」と話題を向けると、「降るんじゃないの」と返答があり、そのあとに「最近の天気予報はよくあたる」との発言がづく。性能の向上した人工衛星の数が増えているのかもしれない。

精度の高い気象予測は、さまざまな利点がある。予定が立てやすく、観光業者ばかりでなく、来客数の予測もできるから、飲食店の仕入れにも影響するはずだ。桜の満開や紅葉のピークに合わせての旅行計画の立てにくさには、多くの人間が思い当たるだろう。

いっぽうでは、〈このあと〉や〈明日〉〈この一週間〉があまりに見通せるようになってしまふ事態の味気なさもある。わたしの属している中高年の登山グループは、「雨天決行」が原則である。気象も、登山という行為の構

連載「セイ」第40回

成要素だと考えるわけだ。スポーツでも、ラグビーは「雨天決行」と聞く。自宅の近所、おいしいのでよく行く餃子店がある。この店では、遅い夕方に目当ての餃子が売り切れとなる日がある。せっかくだら行つてがっかりである。尋ねると「130人前をつくって、売り切れたらお終い」との原則だそう。曜日や、近所の花見で客が増えそうだななどの予測をいっさい立てない。130人前が、味を保ちつつ手づくりできる限界量なのだろう。

## 予測された未来

ムドクターから、「やってみますか」と言われて、いささかの興味もあり、やってみた。医師は、「人生の楽しみが無くなるかもしれないが、」と付け加えるのも忘れなかった。遺伝子検査で得られる情報で重要なもののひとつが認知症の発症率だそう。遺伝子の組み合わせの四つのうち、あるパターンでの発症率は七〇八割に及ぶとの説明を受けた。効果的な処方をもたない現在、この遺伝子検査の告知が医者としては辛い、とも告げていた。さいわいわたしは、認知症はセーフだったが、毎日の飲酒で食道癌になりやすい遺伝子を所持しているらしい。

鈴木一誌

人間は生きることの不安をつねに抱えている。不安に耐えようと信仰や表現活動などがなされてきたのだろう。「今週の運勢」をつい読んでしまい、「四」や「九」の数字を避け、友引や仏滅を根拠もなく遠ざける。あらゆる統計データには、もちろん利潤や経済効果の要素が大きい、背後には生の不安が潜んでいる気がする。手帳をスケジュールで埋めるのも、「痩せよう」あるいは「片づけよう」と考えるのも、現在から将来へと延びていくように思われる道筋を確からしくしようとしているのではない。書店でベストセラー

を眺めると、〈近い将来〉に役立ちそうな書物が多い。史家の渡辺京二が社会の変容について書いている。かつては、「社会がどうであろうと、自分は生きたいし生きてみせるのだ」だった。だが現在は、「社会」は出来上がってしまった絶対的存在なのだ。それから認知され、必要な一員と判定してもらえないと生きてゆけないのだ。

社会が自分を必要としているかを過剰に気づかう社会に対して、「何とおそるべき『社会』のイメージであることか」と記す(いずれも『未踏の野を過ぎて』弦書房、2011年)。近い将来を知りたいとの欲望は、自分とは無関係に社会は進んでいく、つまりは「出来上がってしまった社会」観の鏡像だと思えてならない。(すずき・ひとし/ブック・デザイナー、題字デザインも筆者)